

あそぶ、まなぶ、いきる。

山と溪谷社

An impress Group Company

各 位

2026年3月17日

株式会社 山と溪谷社

<https://www.yamakei.co.jp/>

田んぼの生き物を網羅する名著『田んぼの生き物図鑑』を12年ぶりに改訂
『新版 田んぼの生き物図鑑』刊行！

インプレスグループで山岳・自然分野のメディア事業を手がける株式会社山と溪谷社（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：二宮宏文）は、2026年3月17日、『新版 田んぼの生き物図鑑』を刊行いたしました。



2005年に初版が刊行し、2013年に増補改訂新版となった『田んぼの生き物図鑑』は、田んぼの自然環境に興味を持つ人々のバイブルでした。この長年愛されてきた図鑑を12年ぶりに改訂いたしました！

本書籍は、田んぼとその周辺環境に生息するさまざまな生物を、カメラマン内山りゅう氏が撮影した生態写真を使って、分類ごとに章立てして解説しました。田んぼでよく見られる種から、今や見るのが難しくなった種。近年になって侵入してきた外来種など、600種以上の生き物を紹介しています。

田んぼが食糧生産の場としてだけでなく、さまざまな生き物の住処としても重要なことがわかる1冊です。

【新版のポイント】

1. 新たな外来種や近年分類が分かれた種など新規掲載種を追加！
紹介している生き物は 600 種類を超えました。



イネにのしかかる上翅したばかりの幼蛙。6月上旬

無尾目アマガエル科
ヒガシニホンアマガエル
Dryophytes aspardus

新種のアマガエル 東日本、樺太に分布するアマガエルで、2025年に新種として記載された。近畿地方が分布の境界となっており、東側にヒガシニホンアマガエル、西側にニホンアマガエルが分布する。境界線上では両種の交雑集団がわずかに見られる。ニホンアマガエルとは外見上の識別は難しいが、後肢大腿部の模様パターンを見ることで、ある程度の目安となる。ヒガシニホンアマガエルは大腿部に斑点模様がある個体が多く、学名の種小名 *leopardus* は「ヒョウのような模様」を意味するもの。ニホンアマガエルは大腿部に模様は出現することはあまりない。ニホンアマガエル同様に田んぼや湿地、草原、公園など多様な環境で見られる。生態面での両種の違いなどは明らかになっていない。

【雨蛙の語源】カエルは繁殖期になるとオスがメスにアピールするために盛んに鳴く。本種は「ゲツゲツゲツ」「クワックワックワツ」と大きな声で鳴き、時に大合唱となる。繁殖期以外の昼間であっても、低気圧が近づき、雨が降りそうになると鳴くのがアマガエルの特徴で、そうした鳴き声は「雨鳴(あまな)き、レインコール」と呼ばれ、「雨蛙」の語源となっている。



●最も身近に見られるカエルの代表。田んぼ周辺にはとくに多い。三重県、9月下旬
●アジサイの葉にとまる若い個体。6月
●雨に気づきつりニュースになるアルビノ個体。山梨県
●大腿部の模様の比較。上がニホンアマガエル、下がヒガシニホンアマガエル。ただし、個体差もあることから両種を腿の模様だけで判別することは難しい。

2. 田んぼを餌場や渡りの休憩地として使う「鳥類」を新たな章として追加！

『ハンディ図鑑 日本の野鳥』の著者である叶内拓哉氏の執筆で、田んぼを渡りの休憩地や餌場として使う鳥たちを解説。



突ったイネの二葉穂をついばむオオハクチョウ。(写真/ K)

カモ目カモ科
オオハクチョウ
Cygnus cygnus

日本の代表的な冬鳥 冬鳥。全長140～165cm。9～10月頃に主に千島列島経由で北海道東部へ渡来し、その後本州の越冬地へ移動する。湖沼や大きな池、河川などで休息し、近くの水田地帯などで落ち穂やその根、青草などを採食するが、コハクチョウより水辺での採食が多い。雌雄同色で全身白い。嘴は黒く、根元の黄色い部分はコハクチョウと違って先の方へ尖っている。足は黒い。ふつうはつがいか数羽の幼鳥連れの家族群で行動し、それらが集まって大群になる。

コハクチョウ 冬鳥。全長115～150cm。9～10月頃にサハリン経由で北海道北部へ渡来し、その後本州の越冬地へ移動。湖沼や大きな池、河川などで休息し、近くの水田地帯などで落ち穂やその根、青草などを採食する。雌雄同色。全身が白く、嘴は黒いが根元の黄色い部分があり、その黄色は先の方へ尖っていない。足は黒い。つがいか数羽の幼鳥連れの家族群で一日中行動するのがふつうで、それらが集まって大きな群れになる。夕暮れには休息地へ帰る。



二葉穂が色づいた水田に降り立ったコハクチョウ。(写真/ K)

カモ目カモ科
マガン
Anser albifrons

標準的なガン 冬鳥。全長65～86cm。9～10月頃に北海道に渡来し、徐々に越冬地へ南下する。本州の主に北部や日本海側の湖沼、大きな池などで休息する。日中は近くの水田地帯などで落ち穂やその根、青草などを採食する。雌雄同色。成鳥は全体に褐色だが、腹部には黒い横斑が見られ、若い個体には横斑がないか、あっても細かい。家族群が集まって大きな群れになり、危険がないときには同一場所にとどまり、夕暮れには隊列飛行で休息地へ帰る。



白い頸が特徴的。(写真/ K)

カモ目カモ科
カルガモ
Anas zonorhynchos

全国で繁殖するカモ 留鳥または冬鳥。全長58～63cm。全国の平地から山地に生息し、北国の個体は冬期には南部へ移動するものもいる。雌雄ほぼ同色。雌はお尻の部分が黒いが、雄はその部分の一枚一枚の羽の縁が淡色。カモ類には淡水域を好むものと、海水域を好むものどがいて、本種は淡水域を好む。水気がある場所や、草やその種子をよく食べる。カモ類は本来渡り性だが、近年はあちらこちらで餌付けがよく行われていて、日中でも活動する個体は多い。



黒い嘴で、先端が黄色いカモは本種だけ

3. これまでの掲載種の情報は最新版のものにアップデート！

カブトエビ目カブトエビ科
タイリクカブトエビ
Triops granarius s. str.

雌雄異体のカブトエビ これまで日本で「アジアカブトエビ」とされてきた種。中国北東部と日本の固有種で、日本のものは史前種化種（ほぼ在来種、外来種ではない）と考えられ、江戸時代の文獻にも登場する。基本的にはオスとメスが存在するが、一部で雌雄同体化した個体が確認されている。オスの背甲は丸く、メスの背甲は細長いので識別は容易。和歌山県白浜町の田んぼではシラハマオーストラリアカブトエビと混獲することがある。







- 田んぼで這い回るタイリクカブトエビのオス。泥を舞い上げるので田んぼの水は濁ることが多い。和歌山県、6月
- オスの背甲。背甲は左右2枚の甲殻が合わさったもの。オスは丸みを帯びた楕円形である
- メスの背甲。メスはオスに比べて細長く、長楕円形。上から見比べると分かりやすい
- カブトエビ類は2つの葉脈と中央の小さな目を合わせた3つ目である。小さな目は単眼で「メーアウズ」眼と呼ばれる。通常は甲殻類の幼生のみに存在するもので、成体に残っていることも原始的な特徴とされる
- 体長測定または「耐久期」と呼ばれる卵。直径は0.3mmほど。飼育キットが販売されているが、卵や孵化した個体を田んぼなどに放さないよう気をつけたい

206 5 甲殻類 エビやカニの仲間

カブトエビ目カブトエビ科
ヨーロッパカブトエビ
Triops canalicollis

日本での分布は限定的 西ヨーロッパ原産のカブトエビで、日本では1948年に山形県で初めて見つかった。1977年には「酒田飯盛山カブトエビ生息地」が県指定文化財の天然記念物に指定されている。山形県、宮城県、栃木県などで見つかったりいるが、いくつか異なるものが日本に入ってきているようで、これらが同一種かどうかは不明。雌雄同体で、背甲の小さな暗色斑が特徴である。



背甲にまだら模様があり卵形。写真は山形県酒田市の個体。6月

カブトエビ目カブトエビ科
アメリカカブトエビ
Triops longicaudatus

アメリカ・日本でも分布は広い 米国の中部～西部にかけて広く分布し、日本では1916年に香川県の田んぼで見つかったのが最初である。雌雄同体で、背甲にまだら模様が入る。日本での分布は広く、背甲の模様や外観、遺伝子レベルのわずかな差で少なくとも3つのグループに分かれることが明らかになった。今後の研究では、これらが亜種（もしくは独立種）として分類される可能性がある。



背甲の模様などにはバリエーションがある。写真は広島県広島市の個体。6月

5 甲殻類 エビやカニの仲間 207

【目次】

田んぼとは／田んぼの一年／田んぼの形態／田んぼと獣害／田んぼの言葉

- 第1章 爬虫・両生類 ヘビやカメ、カエルの仲間
- 第2章 魚類 メダカやドジョウの仲間
- 第3章 鳥類 スズメやサギの仲間
- 第4章 昆虫類 トンボやアメンボの仲間
- 第5章 甲殻類 エビやカニの仲間
- 第6章 貝類・その他の動物 タニシやヒルの仲間
- 第7章 植物 水草や雑草

【著者プロフィール】

● 著者：内山りゅう

ネイチャー・フォトグラファー。東海大学海洋学部水産学科卒業。“水”に関わる生き物とその環境の撮影をライフワークにしている。主な写真集に『アユ』（平凡社）、『大山椒魚』（ビブロス）、『青の川 奇跡の清流 銚子川』（山と溪谷社）ほか、主な著書に『山溪ハンディ図鑑 日本の淡水魚 第4版』『日本のドジョウ』『日本のタナゴ』『日本のウナギ』（山と溪谷社）他多数がある。近年はテレビの自然番組の制作にも携わる。

【商品詳細】

書名：『新版 田んぼの生き物図鑑』

著者：内山りゅう

定価：4,620円（本体4,200円＋税10%）

発売日：2026年3月17日

仕様：B5変形判 オールカラー 368ページ

<https://www.yamakei.co.jp/products/2825063770.html>

【山と溪谷社】 <https://www.yamakei.co.jp/>

1930年創業。月刊誌『山と溪谷』を中心とした山岳・自然科学・アウトドア・ライフスタイル・健康関連の出版事業のほか、ネットメディア・サービスを展開しています。さらに、登山やアウトドアをテーマに、企業や自治体と共に地域の活性化をめざすソリューション事業にも取り組んでいます。

【インプレスグループ】 <https://www.impressholdings.com/>

株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：塚本由紀）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社山と溪谷社 担当：平野

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-105 神保町三井ビルディング

TEL03-6744-1900 E-mail: info@yamakei.co.jp

<https://www.yamakei.co.jp/>